

## ヨハン・ホイジンガの生涯とその時代 —近代文明批判の社会的背景に関する一考察—

杉 浦 恭

Takashi SUGIURA

(健康科学選修)

### はじめに

これまでわが国では、ホイジンガ (Johan Huizinga 1872-1945) は一般的に歴史家、とりわけ中世あるいはルネサンスの研究家として認識されてきた感が強い。しかし、ホイジンガの研究活動を調べてみると、彼は人生の後半生をかなりの部分、近代社会・近代文明批判に費やしている。これは、ホイジンガの生きた時代が、世界史の中でも激動の時代であったと同時に、ヨーロッパが目覚ましく近代化を推し進めたことに影響を受けたものと考えられる。ホイジンガの研究活動に何らかの影響を与えたと考えられるヨーロッパ社会の近代化はいかに進んでいったのか。本稿では、ホイジンガの生きたオランダ社会に焦点を絞って、オランダの歴史的、社会的状況がいかにホイジンガの生涯と研究活動に影響を与えたかについて若干の考察を試みたい。

### 1. 1850—1945年のオランダ

#### 1-1 19世紀後半のオランダにおける社会制度の進展

19世紀半ばになるとネーデルラント国王ウィレム I 世の強圧的な政策に対し、国内では次第に自由主義運動が起こっていた。自由主義者達をまとめていたのが、オランダ最古の大学ライデン大学憲法学教授をしていたトルベッケであった。トルベッケを中心とする委員会により、1848年、改正憲法が発布された。この改正により、責任内閣制、直接選挙、信仰・教育・言論・集会の自由が保障され、立憲君主制が生まれた。今日のオランダの基本的枠組みはこのときに成立したといってもよい。その後、トルベッケは、郵便電信制度、鉄道の敷設などオランダの近代化に大きな貢献をした。

このころと時を同じくして、オランダ国内では政党の結成が活発となり、中でも、ブルジョワジーを支持基盤とする自由党と、教会派勢力を基盤とする反革命・カトリック両党が互いに対立するようになった。<sup>(1)</sup> 教会派勢力の支持者には下層階級の市民が多かったの

で、自由党は次第に労働者階級の声を無視し続けることができなくなった。教会派が第一に要求したのは選挙権の拡大であった。その結果1887年には憲法の改正が行われ、有権者数は10万人から35万人に増えた。とはいえ、それでも当時の有権者数は、全人口の1割弱であった。しかし、議会の運営が、ブルジョワジーから中・下層階級へ次第に拡大されていったという点では意味のあることであった。1890年の選挙では、自由党が他を制し、政権を握ったが、1901年まで続くこの政権は、これまで半世紀維持してきた自由党政権の最後の10年となった。

オランダ社会に目を向けると、1860年から1870年までの10年間は、最も近代化の進んだ時期といってもよい。

「この10年間に国内の鉄道網が完成し、一般関税法 (1862) が成立して以後半世紀におよぶ自由貿易を推進し、アムステルダム・ロッテルダムの両港をそれぞれ北海に結ぶ新運河の建設が決議され (1863)、近代社会の要求に応じる公立の高等学校がつくられた。また、トゥエンテや北ブラバントに織維工業が発展し、鉄道の発達は次第に金属工業や機械工業を育成した。植民地貿易に加え、ドイツのルール工業地帯を後背地として持つオランダ海運の活動は造船業を発展させた (今来編1992, 335-336頁)。」近代化の影響は農村にも及んだ。都市への人口の集中化とその増加は、穀物の値段を上げることになり農業従事者の家計を潤した。また、乳製品の需要が増えたことで酪農家の経営も好転した。しかし、オランダの農業は、工業の近代化に比べれば技術的に遅れていた。1878年の農業恐慌は、アメリカとロシアから入ってくる大量の小麦によって農産物価格の下落が引き起こしたものであるが、加えて、それまで好調であった酪農製品の国外輸出が減少したこと、それにより、国内価格が下がったことなども影響して、農業従事者は、経営方法の転換を余儀なくされた。これを機に農民は、農業の集約化、農業協同組合の結成、園芸農業の開始など様々な策をもって不況を乗り切ろうとした。しかし、農業人口の減少そのものには歯止めがかからな

かった。

「1890年代はオランダの社会と文化が決定的に転換した時期である。自動車姿を現し、市街電車が走り、フットボール連盟・競技連盟が生まれ、万国平和会議（ハーグ）が催され、フィリップス電燈会社・市営電話会社が誕生し、ザイデル海干拓計画の発足、北海・メルウェーデ両運河の完成があり、協同組合が普及し婦人選挙権同盟が設立され、首都アムステルダムに新築された市立劇場ではヘイエルマンスの社会主義リアリズムの戯曲が上演された。社会主義運動と普選をめざす大衆行動は80年代に引き続いていっそう大きくもりあがった。新しい世紀はすでに90年代に幕を切った観がある。

奔流の底には、しかし動かない部分もあった。いぜんとして駅馬車と帆船が走り、因習と頑固な階級意識があった。不況は続き、90年冬のひどい飢饉に、91年、92年、インフルエンザの慢性的流行が加わり、93年、94年の深刻な国際的恐慌はこの国にも大量の失業者を発生させた（栗原 1982, 101頁）。」

## 1-2 20世紀前半のオランダにおける社会情勢の変化

20世紀の幕開けから第1次世界大戦が始まるまでのオランダは、国内の政局が不安定であったにもかかわらず、平和なひとときであった。1897年、長い不況から抜け出した後、経済は好況を維持し、社会立法と教育の普及によって労働者階級は解放され、市民の民主化への要求が高まり議会民主制が発達した。1903年2月の鉄道ストライキの成功は、資本家達に労働者の団結力を十分に示した。

しかし、1914年、大戦が始まると状況は一変した。オランダは連合国側にもドイツ側にも属さず中立の立場をとったが、両陣営の間に位置する以上、戦争の影響から逃れることは不可能であった。戦争による海上貿易の妨害は、オランダの産業を壊滅状態にした。

このような状況に置かれながらも、国内政治の面では積極的な進展が見られた。1917年には普通選挙法が可決され、25歳以上の男子に選挙権と被選挙権が与えられた。1919年には婦人参政権が認められた。これにより政治の場への大衆参加が実現したことは事実である。選挙権が25歳から23歳になったのは1946年であった。また、1918年には8時間労働が決められたほか、14歳以下の児童の労働が禁止され、土曜の半休・日曜の就労禁止が決められた。さらに、老人・病人・身体障害者に対する保険制度が整い福祉国家への第一歩を歩み出した。

戦争終結後は一時的に好況期があったものの、すぐにインフレーションが進行し、政府の財政は貧窮して、社会補償制度は有名無実となった。失業者が増大し、各地でストライキが勃発した。1929年10月アメリカで起きた大恐慌は、オランダ経済にも波及し、国民の生

活はいよいよ厳しくなった。中継貿易や農産物の輸出に国家経済の多くを依存しているオランダにとって、世界恐慌は、賃金の下落、生産力低下、国内購買力を減退させた。

「1932年、失業者は40万人を越え、政府は失業救済のために灌漑・干拓・道路建設などの公共事業を企て、他方では革命思想の浸透を警戒して新聞・ラジオなどを検閲し、官吏の革命政党加入を禁止した。恐慌下の社会的動揺のうちにオランダにもナチズムが波及して、1935年の地方選挙には30万票を獲得した。しかしながら生活の窮乏と政府の無策に失望した労働者、反資本主義の心情の小売商人、農民層のあいだに浸透したナチズムも、教会の反対や国際政治の緊迫によるナショナリズムの勃興、さらに社会主義政党が階級闘争と非武装の主張をやめたこと、などによって人気を失った。<sup>②</sup>政府は各国と通商協定をむすび、1936年には輸出競争力を高めるために他国にならって通価の平価切り下げを行ったが、列国の軍備競争はオランダの工業、ことに造船業への注文や、東インド植民地の砂糖・ゴムへの需要を活発にし、失業を減少させた（今来編 1992, 380-381頁）。」

このころ既に自由貿易主義の時代は終わり、オランダは1936年に金本位制を廃している。

オランダ社会は、カトリック・プロテスタント・社会主義派・自由主義派が、それぞれ縦割りの社会をつくり、教育・政党・労働組合・新聞など、社会生活一般に強い影響力を持つようになった。<sup>③</sup>この時期のラジオの発達も、これらの派閥の考えを人々に浸透させるのに有効な手段となった。

文化面においては、オランダ近代建築の父と呼ばれ、機能主義的建築を主張したベルラーへ、絵画では幾何学的抽象画を描いたモンドリアン、文学ではテルブラーク、ペロン、フェストダイク、アハテルベルフなど多くの作家を生み、詩人ではロラントホルスト、ネイホフを擁した。もちろんホイジンガもこの時代の歴史家として国際的な名声を得ていた。自然科学分野では、物理学者のローレンツ、化学者のデバイ、生理学・医学者のエイントホーヘン、エイクマンがそれぞれノーベル賞を受賞している。

1939年第二次世界大戦が始まると、翌年ドイツはオランダを侵略し、5日間の戦いの後オランダは降伏して占領された。新聞はナチ宣伝の道具となり、ナチズムに傾向しない政党や労働組合は解散された。しかし、ナチスに対する抵抗運動は、教会をはじめ、学生、多くの地下運動家によって全国に広がった。学問の自由に対する擁護と人種的な差別に屈しなかったライデン大学はナチスによって閉鎖され、多くの知識人、芸術家が身柄を拘束された。

1945年5月4日、オランダはついに連合軍によって

解放されたが、大戦の結果、農地は荒廃し、堤防も壊され国土は浸水状態となった。25万人もの命が失われ、工場の40%が破壊された。

## 2. オランダの産業革命

ホイジンガの研究活動とオランダの社会状況を論ずる前に、オランダの産業革命に触れておきたい。なぜならば19世紀後半に目覚ましく進んだオランダの近代化は、他のヨーロッパ諸国に半世紀遅れて始まった産業革命によるところが大きいからである。

1814年ネーデルラント王国が成立し、ウィレム1世が国王に就任したが、彼は王国の目標を中継貿易の再建に置いていた。オランダの産業革命が遅れた原因はここにあったのである。

「新政府の指導者ホーヘンドルフは『いまや海は開かれ、商業はよみがえらん』と国民によびかけ、革命期に採用された若干の保護主義的関税を廃止して、1725年制定の自由貿易を原則とする関税法を復活させた。しかしながら、イギリスはすでに産業革命を達成し、時代は資本主義経済に突入しようとする時期にあつて、工業の保護育成に意を用いず、ひたすら貿易のみに国民経済繁栄の基礎を求めたオランダの支配層は、自己の利益にとられるあまりに視野が狭かったばかりでなく、国際貿易構造の変化を無視して非現実的であったといわざるをえない。その結果、中継貿易は復活せず、産業の近代化もひどく遅れをとった。とりわけ北ネーデルラントにおいては、長期にわたる失業と窮乏によって労働者は無気力になり、すぐれた技術者や熟練工といえはすべて外国人だったし、資本家は企業家精神に乏しく、伝統的生産方法を守ってわずかの利潤に甘んじていた（今来編 1992, 324-325頁）。」

さらに、Mokyr (1976) によれば、オランダにおける産業革命の遅延は、18世紀以降、オランダにおける人件費の高騰が原因となっていたということである。1819年には、すでに、南ネーデルラント（ベルギー）における人件費が北部（オランダ）よりかなり安く、この人件費の違いによってベルギーでは早期に産業革命を実現する事ができた。1850年ごろまで続くオランダの人件費の高さが産業革命を遅らせたのである。人件費の高かった理由は、黄金時代（17世紀）からの比較的豊かな経済状態による高賃金体系が、労働者に以後、賃金を下げることが許さなかったことにあり、これが支障となって工業化が進まなかった。

18世紀の半ばすでに東インド会社は勢いを失っていたが、1834年以降、本国のあらたな植民地政策によって、インドネシアからの収益は再び盛り返した。本国政府の行った強制栽培制は、植民地を市場とする綿工業や植民地から取れる物産を加工してヨーロッパに輸出する中継貿易を再び甦らせ莫大な利益を上げた。8

億ギルダーを超える巨額の収益がオランダに入ったのである。これを行ったのが新しく生まれしてきたブルジョワジーである。植民地政策による資本の蓄積は、オランダ国内の鉄道敷設と産業における機械化を可能とし、1860年以降急速に近代化を進めることになり、遅ればせながらオランダにも産業革命が起こる。<sup>(4)</sup>

「すでに産業革命が進行中の隣接諸国に比べて著しく立ち遅れていたオランダ経済にも、1830、40年代になるとようやく変化の兆しが現れた。ベルギー独立にさいし南部から引き揚げてきた資本家がハーレムに開始した紡績・プリント工場が、北部に大きな刺激を与えた。またベルギー独立によって失われたヘントの綿工業にかわって、植民地市場向けの輸出綿布を製造するため、政府とネーデルラント通商会社の保護のもとに、トゥエンテ地方にあるメロー・エンスヘデに最初の紡績工場がつくられた。また、アムステルダム汽船会社、ロッテルダムのネーデルラント汽船会社、さらに39年アムステルダム―ハールレム間に始まり徐々に延長された鉄道網などと関連して建設された修理工場が、蒸気機関やスクリュエあるいは機械の製造を開始し、フェイエノールト（造船・機械）・ウェルクスポール（機械）のような大工場に成長した。他にザーン地方の製紙工場、ハールレムと並ぶ工業都市マーストリヒトのガラス・製陶工場があり、アムステルダムの製糖業・ダイヤモンド研磨業も近代化しつつあった。

だが、これらの工場はむしろ例外現象であつて、当時のオランダは家内工業の零細経営が支配的で、資本家の企業精神は欠如し、資本調達的手段も発達せず、手工業者＝労働者層は失業・低賃金・長時間労働・劣悪な環境にあえて積極的な勤労意欲を欠き、自給自足的な農民も、その日暮らした貧しさのうちに埋没していた。1848年の憲法改正と自由経済政策、鉄道と運河の整備、海上運輸、ライン河航行の発展、ロンドンで開催された世界博覧会(51年)の刺激によって、50年から70年にかけてオランダはようやく産業革命の時期を準備したのである。70年ごろまでに後背地ドイツの産業発展、ジャワの強制耕作制度廃止による自由農業企業の発展が自由貿易に拍車をかけ、植民地物産の加工業や中継貿易を繁栄させた。70年代、アムステルダム・ロッテルダム両港とともに北海と結ぶ運河を完成し、郵便・電話が使用され、トゥエンテ・ロッテルダム・アムステルダム諸銀行が設立され、人口は1825年の約250万から世紀末の500万と倍増し、都市が栄え、工場制度の展開が小経営を駆逐し、蒸気機関が産業を征服した（栗原 1982, 80-82頁）。」

労働力の分布を見ると、第1次産業の就業人口は、19世紀後半にはそれほど変化がなかったのに対し、鉱工業・サービス業はそれぞれ産業革命以前と比べて2

倍以上に増加した。特に北部のフリースラント・フローニンゲンといった農業地域から、西部の都市部への人口移動が顕著であった（水島 1993）。

オランダの産業革命はこうして1890年ごろまでに完了する。他のヨーロッパ諸国より、半世紀産業革命の遅れをとったオランダは、以後、加速的に産業資本主義を進め、20世紀初頭には他国に劣らない資本主義国家となっていったのである。

### 3. ホイジンガの生涯と研究活動

これまでに概観した19世紀後半以降のオランダ史とオランダの産業革命をホイジンガの生涯に対照させることで、ホイジンガの生きた時代背景がある程度イメージできるものとする。また、ホイジンガの研究活動が、社会情勢の変化に何らかの影響を受けているとの推測から、ホイジンガの研究活動と社会状況の変化についても足跡をたどってみることにする。<sup>(5)</sup>

#### 3-1 少年期のホイジンガ

ホイジンガの家系は、プロテスタントの一派メノ派教徒（再洗礼派）である。16世紀以後、祖父の代までは、ほとんど再洗礼派の牧師をつとめてきた家柄であるが、父の代になり終わった。

1872年12月7日、Johan Huizinga はフローニンゲン大学生理学教授デルク・ホイジンガの次男として、オランダ北部の商業都市フローニンゲンに生まれた。父デルクは家のしきたりに従って当初は神学を修めたが、医学への強い興味から自然科学系に身を転じた。生母ヤコバ・トスケンスの出身は一家がみな教師の家系であった。ヤコバは1874年に死去。その2年後にホイジンガは新しい母ヘルマンナ・マルハレータ・デ・コックを得た。ヘルマンナは、親戚がレヘントと呼ばれる社会的地位の高い門閥市民の出身であった。ホイジンガの家柄は、父が教授という知的エリートではあったが、社会的には中流階級であったといえる。

ホイジンガが6歳のころから父デルクが病気にかかり、治療費がかさむため家計は苦しくなる。本を買うことさえ難しくなった。父の病因は梅毒で次第に神経系が侵されていった。デルクの学生時代は、なかなかのプレイボーイで、女優レイジー・ミラーとの噂もあったほどである。学生時代のルーズな下半身が、この病因であったとする見方が強い（Krul 1990, p46）。

1879年、ホイジンガが7歳の時フローニンゲンで行われた仮装行列（1506年東フリースラントのエドツァルト伯のフローニンゲン入場をテーマにしたもの）は、歴史に対する強烈な美的印象をホイジンガに与えた。晩年になってホイジンガは、このとき受けた歴史的感銘が、少年時代の自分にとって深くかつ根強く心に刻み込まれたと自伝の中で述べている（Huizinga 1943, p12）。

さらに、小学校4年の時の担任 I. ナイフェルが歴史の授業で話した「祖国史」はホイジンガの後生にとって決定的な影響を及ぼしたと言っても過言ではない。このときを振り返ってホイジンガは、自分の歴史的知識の枠組みが、今でもナイフェルの教育によるところが大きいと言っている（Huizinga 1943, p13）。

少年時代のホイジンガは、自然科学には全く興味を示さなかった。友達が皆SF小説を読みあさっていたときに、ホイジンガは独りアンデルセンの童話を読んでいたという。

初等教育の終わり頃からホイジンガは紋章学、小銭収集に興味を持ちはじめ、かなり深い知識と歴史的に価値のある硬貨を持っていた。歴史学の深みにおもしろさを感じ始めたのであった。

ホイジンガが少年時代であったオランダは、社会が急速に近代化し、科学的進歩を遂げた時期であった。鉄道網が拡がり、運河が建設され、繊維工業を始め金属・機械工業が発達した。

綿紡績工場の生産高を見ると、一工場当たり平均して1861—1863年にかけては700トン生産していたのが、1871—1873年にかけては5800トン、1881—1883年には9000トンと伸びている。

鉄を生産するための蒸気機械の輸入量は、1860年を100とすると1870年には200、1880年には400と10年間で2倍ずつ機械の量が増えている。

#### 3-2 青年期のホイジンガ

1891年9月、ホイジンガはフローニンゲン大学文学・哲学部ネーデルラント文学科に入学した。学生時代のホイジンガは、文学の他、芸術にも強い興味をもっていた。また、ホイジンガは「80年代運動」<sup>(6)</sup>の熱烈な信奉者であり、芸術を学問より上に置くという考えに賛同した。そのため、学生時代を通して、新聞を一度も読まず、政治・経済に対する知識は皆無といってもよかった。自然科学に対しても相変わらず無関心であった。このような態度が後に新聞や科学の進歩に対する批判を行う下地となったのである。また、ホイジンガは20歳代の終わりまで大変な夢想家で、日中街中を散歩しながら白昼夢にふけり恍惚状態になる癖があった。

1895年、23歳のホイジンガは学位論文準備のため、翌年にかけての冬、ライプツヒヒ大学に留学している。当時新興の学問で人気のあった比較言語学にひかれてのことであった。

1897年、古代インド演劇論のなかから喜劇の人物ウイドゥーシャカ（道化）を取り上げ、インドにおける滑稽の概念とその感情の種類の図式を卒業論文として提出し学位を得た。後の大著『ホモ・ルーデンス』の執筆は、遊びに関するこの研究によって動機付けられたといってもよい。

その後ハーレム実科高等学校で歴史を教えることになる。古代から近代にかけてのヨーロッパ史を講義する中で、中世の部分が一番得意であったと、ホイジンガは回顧している。しかしながら、生徒の扱いはどうしてもうまくならず、決してよい教師とはいえなかったことも自伝に書いている (Huizinga 1943)。ただ、授業の中で時折ひとこま漫画や時代を風刺する滑稽なコンテを黒板に描くことで、生徒の心を引きつけ笑いをとっていたことは面白い。

ホイジンガにとって高校での講義がやりにくかった理由として、当時は自然科学が人文社会に対して決定的な優位性をもっているとの考えが支配的であり、生徒はさほど歴史に興味を示さなかったことも挙げられる。19世紀の終わりから20世紀にかけて、オランダの教育は次第に自然科学系重視の傾向がでてきた。これについてはホイジンガ自身、教育の近代化の愚かさという視点で批判している (Huizinga 1935)。自然科学についての知識の量は人々の間で増えたが、反面、個人の判断力・創造力は減退してしまっただと。

ホイジンガは31歳から次年度にかけての2年間、アムステルダム大学私講師を務め、古代インドの文学・文化史について講義した。このころからホイジンガは、言語学者たることに飽き足りなくなり、フローニンゲン大学の旧師で歴史学者P. J. ブロックの指示によりハーレム市の起源に関する歴史研究に取り組む。

このころ父デルク・ホイジンガと弟が死去。父は長年の病が末期を迎えての死であったが、弟は自殺であった。弟は、父の病状を見て、いずれ自分も性病で死ぬのだという精神的な不安からの自殺であった。対外的には、腎臓病が死因であると公表された。

ホイジンガは、近代に入ってから人々の間で道徳規範が退廃してきたことを批判しているが、その中でも性倫理について開放的になり過ぎていることを指摘している (Huizinga 1935)。このままではいずれ人類は破滅するであろうとまで述べているが、この背景には父と弟の死があり、性の開放的なムードに対する強い嫌悪感がホイジンガの中にあっただといってもよい。

1905年、論文「ハーレム市の成立」が高い評価を得、ブロック教授の後押しもあって、フローニンゲン大学外国史及び国史学教授に就任。11月4日の就任講演は「歴史概念の美的要素」であった。この講演で、ホイジンガは、歴史は過去のイメージを心に描くことだ、あるいは映像として呼び起こすことだとして、歴史研究の理論・方法論上、美的直観の重視を強調した。

ホイジンガが青年期であったオランダは、社会生活の中で直接肌に感じるような変化が現れた時期である。自動車が姿を現し、電気の普及によって街灯が灯り、市街電車が走るようになった。百貨店の出現はそれまで上流階級の特権であったショッピングの楽しみを、中・下層階級にまで実感させることになり、一気

に人々の物質的欲求をあおり立てることになった。これは後に大量生産・大量販売の誘因となり、商品はそのために画一化・均質化してゆくことになる。ホイジンガはこのときから文化の画一化と大衆化を感じ始めていたのであろう。国民総所得を見ると1880年を100とした場合、1890年には120、1900年には150、1910年には190と伸びている。努力すれば多くの収入を得ることができ、多くのモノをもつことが可能であることを大衆は実感してきた。金持ちも貧乏人も同じ食器で食事をするようになり、少しずつ人々の間に平等意識がでてきたが、これは本来混同してはならない均質化そのものである。この時期は次第に人々の生活が物質的に豊かになり、利便性を感じるようになったときであるといえる。

また、各種の組合や連盟が生まれ人々の所属感や結束感がでてきた時期でもある。90年代になって、資本主義の発展と不況により、それまで経営者と職人の間で存在していた家父長制的温情主義はなくなり、労働者が労働運動を起こし、組合を結成して経営者に対抗するようになった。90年のメーデーには、レイワールデンに15000人も労働者が結集した。

もう一つ注目すべきことは、帝国主義政策による軍事予算が増大したことである。1882年から10年間で3億2千万ギルダーであったのに対し、1902年からの10年間は5億ギルダーと増えた。この事実は平和主義者ホイジンガに、ヨーロッパ列強国に続いてオランダもかと思わせたに違いない。

### 3-3 壮年期のホイジンガ

1915年1月、ホイジンガはライデン大学外国史及び歴史地理学教授に就任。就任講演は「歴史的生活理想について」であった。人類の歴史には、それぞれの時代にそれぞれの崇高な理想が存在し、その理想を社会生活で実現しようとする努力が質の高い文化を創り出したとホイジンガは述べている。しかし、19世紀以降は崇高な理想が人々の間から無くなり、代わって効率性、経済関係のみに心を奪われるようになってしまったことも暗に批判した。

1818年『アメリカの人間と大衆』を出版。文化史の見地からアメリカ大衆社会の分析とさらに現代文明批評を行った。ヨーロッパ文化の壮麗さに比べ、アメリカ文化の浅薄さは研究に値しないと考えていたホイジンガであったが、アメリカを調べてゆくうちに、文化にとって、さらに社会にとって最も病理的な状況がここにあるのではないかと考え、文化の成熟にとっての批判的見地からアメリカを分析した。

翌年、ホイジンガは彼の代表作『中世の秋』を出版。その後多くの言語に翻訳された。さらに1920年、論文「ルネサンスの問題」を執筆。ルネサンス概念の正確な把握を再検討した。24年にはロンドンの出版社の企

画『オランダの偉人たち』叢書の一冊として、評伝『エラスムス』を出版。このころホイジンガは歴史家として世界的な名声を得た。

1924年7月、ホイジンガはライデン大学でアメリカ人学生のために「オランダはいかにして一つの国民になったか」を講演した。アメリカという巨大な国家から見ればオランダは一小国にすぎないが、オランダは独自の歴史と文化をもった国家であり、政治や軍備の強さではなく、長い伝統の中で培われた文化の重みでその存在を主張できる。それ故に他国の文化をも尊重し得る。多様性の尊重こそ世界的和合の基礎であることをホイジンガは講演で説いた (Huizinga 訳書 1990, 371頁)。この講演からは、政治力・経済力・軍事力といった近代社会の3大要素の強化よりも、むしろ文化の重み、精神的価値を大切にすることが肝要であるといったホイジンガの信念がうかがえる。

1926年ホイジンガはアメリカを2カ月ほど旅行し、そこでプラグマティズムと物質主義の社会アメリカという印象をもった。アメリカに対し、機械化された日常生活と画一化されてゆく文化というネガティブな評価を下した反面、ヨーロッパに消えつつある「善意」と「奉仕」の精神が残っているとする好感的な評価もしている。アメリカから帰国後『生活するアメリカ、考えるアメリカ』を出版し、アメリカの学問の方向性と近代化一般に対する批判をした。これは後にホイジンガが近代文明批判家となっていった契機といえる。

1929年には王立科学アカデミー歴史・文学部門の主席になる。論文「文化史の課題」, 「ルネサンスとリアリズム」を発表。翌年3月から4月にかけて、パリのソロボンヌ大学で「ブルゴーニュ国家 — そのフランスとの関係とネーデルラント国民の起源 —」を講義した。

ホイジンガの壮年期は、オランダにおいて公教育と普通選挙権が拡大した時期であった。1-2で述べたように1917年には普通選挙法が可決され、25歳以上の男子に選挙権と被選挙権が与えられた。さらに、1919年には婦人参政権が認められている。これによって大衆の政治への参加が決定的となり、数の論理が政治を左右するようになってゆく。後にホイジンガは、大衆の政治に対する参加について懐疑的な見解をもつようになる (Huizinga 1935)。というのは崇高な理想をもった文化や社会は知的エリートによって形成されるものであると考えていたからである。ホイジンガのエリートに対する特権意識については問題があるものの、オランダにおいてもナチズムを信奉する人間が少しずつ増えてきたことを考慮に入れれば、理解できないでもない。

また、教育の拡大について見てみると、初等教育では1930年までに100%の児童が就学するようになり、中等教育では、1900年に4%であったのが、1910年には

8%、1920年には11%、1930年には16%と、着実に就学率は伸びている。ホイジンガは教育の拡大がその意味するところ、国民全般的な教養や文化のレベルを高めることにはならず、半教養を身につけた大衆はやがて均質化した考えと画一化した文化をつくり出すとして批判している。しかし、誤解してならないのは、教育の拡大そのものが問題ではなく、その内容や方法、そして教育を受ける側の態度に問題があることである。この点に関してホイジンガは多くを語っていないことが残念であるが、教育学者でない以上致し方ないともいえる。

ホイジンガは、「大きな企業や事業グループが国家に対して影響力を持つようになり、人々の社会生活が企業によって征服されるようになった。(Huizinga 1925)」また、「蒸気機関から電気へと、工業的、技術的発展が大きく進むにつれ、この発展の中にこそ文化の進歩があるのだとする錯覚がはびこってきた。(Huizinga 1938)」と述べ、いわゆる第2次・第3次産業が人々の社会生活を変え、影響力をもってきたことを批判している。参考までに産業別労働者数の変化を見ると、1899年をそれぞれ100とした場合、1930年には、第1次産業で111、第2次産業で195、第3次産業で189となっている。ちなみに1899年の第1次産業に携わる労働者数と第2次産業に携わる労働者数はともに59万人であった (vries 1978)。実際に多くの人が工業・サービス業で働くようになったことはこの数値からわかる。

### 3-4 晩年のホイジンガ

1933年、ホイジンガは王立科学アカデミー会長に就任。1月、ヒトラーがドイツ首相になったとき、ベルリンで「西、中央ヨーロッパの仲介者としてのネーデルラント」「ブルグント — ロマン民族とゲルマン民族相互間の関係の一つの危機 —」を講演した。

ライデン大学総長となったホイジンガは、2月ライデン大学 358年記念講演「文化における遊びとまじめの境界について」を行った。これは1938年に出版する『ホモ・ルーデンス』の骨子について、ホイジンガが描いていたことを述べたものである。

1933年にはライデン大学で国際学生会議が開催されたが、その席上で、ドイツから来たナチス代表の学生が、人種に関する優劣といった差別的な政治的発言をしたことに対し、ホイジンガはナチス代表団に退席を命じた。これがきっかけとなり、以後ホイジンガはナチスの好ましからざる人間としてマークされるようになった。

1935年には、ホイジンガが近代文明とナチズムに対する自らの見解を明確にした著書『朝の影のなかに』を出版した。近代がかかえる様々な問題を鋭く批判したことで高い評価を得、ヨーロッパ内で数ヵ国語に翻

訳されている。同時にこれは、ナチズムに対する批判を間接的に行ったものであるが、ホイジンガの意図するところは、ナチズムを越えた近代社会一般の病理的現象、すなわち物質的価値の過度の重視によって起こる精神的価値の軽視の問題、受け身の態度をもった大衆の増加が社会全体の中で批判力・創造力を喪失してゆく問題にある。そしてこれらが文化を低迷させるということにまで及んでいる。

ホイジンガは『朝の影のなかに』で、大衆を洗脳する道具としてラジオの普及を批判している。また、ラジオの普及によって人々が知識や情報を本から得ようとしなくなったことも指摘している。本を読むことで己の生き方や道徳を養うことができるはずなのに、大衆は安易なラジオに知識や情報源を求めるようになってしまったというのである。

この時期にラジオの普及と人々の間で読まれる本はどうだったのだろう。ラジオの普及台数を見ると、1935年には59万台であったのが、その4年後には102万台に増えている。本の出版数を見ると、全体では1930年から1940年までおよそ年間6000冊と平均しているが、分野別に見ると、社会科学がこの10年間に1200冊から半減し、文学もおよそ600冊から100冊へと激減している。逆に若干であるが増えているのは、簡単な短編小説や詩である。出版部数が即、読書数に結びつくとは言えないが、それでも熟慮、判断を必要とするものや、倫理に関する分野は、読まれなくなってきていることがわかる。読むとすれば、気楽で、思考を必要としないようなものであったといえる。

ドイツですでに第一勢力となったナチスの影響は次第にオランダにも及び始めた。はじめはイタリアのファシズムの影響を受けていたオランダであったが、ドイツのナチズムが失業者の減少に成功すると、オランダでもナチズムに対する信奉者が増えた。1935年のオランダ地方議会の議員選挙ではナチ党員が7.9%を占めた。民主主義という数の論理によって社会の方向性を決定することは、判断力を失った大衆に国家の行く末を任せることであり、数の上では少ない知的エリートの考えは少数意見として抹殺されてしまう可能性がある。ホイジンガはこの状況を見て、倫理観の危機と、文化の危機との両面から捉え、以後ナチズムを批判し続けたのである。

オランダでは19世紀の終わりから次第に中・下層階級が選挙権を獲得し始め、1919年までには25歳以上の男女に選挙権が与えられ、事実上大衆が政治を動かすようになった。ホイジンガは、今や何処にいても人ばかりといった、街に溢れんばかりの大衆を危険な存在と考えていたが、果たしてオランダでは19世紀の後半以降、それほど人口が増加したのであろうか。

オランダの人口の変化を調べてみると、ホイジンガが生まれた7年後の1879年におよそ400万人であった

人口が1931年には800万人を越え、半世紀の間に2倍に達している。1790年におよそ200万人であったことからすれば、オランダの人口はホイジンガの生きた時代に爆発的に増えたことがわかる (Lee 1979)。

ホイジンガは1938年に国際連盟知的協働委員会副議長を務める。この年『ホモ・ルーデンス』を出版。古今東西の「遊び」を人類の歴史の中から縦横無尽に取り上げ分析することで、文化創造の機能として「遊び」を位置づけた。同時に、社会生活や現代文化における「遊び」の要素の喪失を指摘し、文化の危機を説いている。現代文化のゆゆしき問題は、文化創造のプロセスに「遊び」感覚が欠けていることと、神聖さがなくなってきていることにあると述べ、その根元的な原因を功利主義、近代合理主義、そして物質文明礼讃のムードに求めた。

第二次世界大戦が始まると、ホイジンガは1940年にライデン大学で「前世紀末葉までのヨーロッパ史における愛国心と国家主義」を講演する。その中で、愛国心は人間の長所であるが、ナショナリズムは人間の短所どころか悪徳であると言い、歴史的生成過程から見てもこの二つは別のものであると述べた。大国主義に対するホイジンガの怒りと物質主義に対する憂慮の念が講演の中で見え隠れする。5月10日、ドイツ軍がオランダに侵入し、5日間の戦闘の後、オランダ国軍は降伏。ライデン大学は閉鎖された。

1942年8月、70歳に達した老ホイジンガは、ナチスにとって思想的に危険な存在として、セントヘボンズ近郊シントミヒエルスヘステルの強制収容所に監禁された。10月に釈放されたが、アルンヘム郊外の小村デ・ステークに居住地を限定された。

翌年、自伝『わが歴史への道』を執筆。この最後の部分でホイジンガは、自然科学・数学・技術・さらに哲学についても自分が無知であったことを認めるとともに、それ以上にこれらの分野に対して自分が冷淡であったことを書いている。これは、ホイジンガがそれまで自然科学系の分野に対して、近代社会のいわば悪の根源とでもいうべき評価をしていたことに対する若干の反省感からでた言葉である。文明の進歩とそれによる生活の利便性は、ホイジンガのいうとおり一面では問題があるものの、他方では人類の幸福に貢献した面もあること、さらにこの流れは今後も変わることはないであろうことに気づいての言葉であったと推測される。

また、遺著とも言うべき『汚された世界』を執筆し、過去100年間における文化の喪失を述べた上で現代の文明批評・時代批判を行った。ホイジンガはこの著書の中で「デモクラシー」という語を取り上げ、この言葉は今日、一見、人間の幸福を確約するかのように使われているが、本来この言葉は群衆による社会の支配を意味するものであり、決して全てのケースにおいて

幸福へ向かうものではないと考えた。民主主義は高い文化をもった国民によって実現される場合においてのみ、幸福が約束されるというのである。これについてはスペインの哲学者オルテガも同じ立場に立っている。

1945年2月1日、デ・ステークで死去。大戦終了のわずか3ヶ月前のことであった。死後『汚された世界』が出版された。

## 結 び

ホイジンガの生きた時代、それはオランダの産業革命が始まり、その後急速に社会が近代化した時期であった。また、歴史的に見ても、二つの世界大戦とその間の経済恐慌など、激動の時代をホイジンガは生き抜いたのであった。

ホイジンガの青年期、1890年代のオランダは科学技術が急速に進歩し、大衆はその素晴らしさに感嘆しながらも、他方では、己の知識の限界を超えた文明を当惑しながら受け入れていた。効率性・利便性ゆえに半盲目的に受け入れた近代文明は、その後次第に影の部分を見せてくる。しかし、産業資本主義がすでに進行していたオランダ社会では、後戻りはおろか、もはや立ち止まり熟考する余裕さえなかったのである。物質的な豊かさや技術の進歩は絶対的な肯定的価値を与えられ、その後も善悪の判断基準となっていたのである。

20世紀に入ると、選挙権が拡大され、それまで国政に対してはもの申すことができなかつた中・下層階級の人々が政治に参加するようになった。数の上では上流階級や知識層を上回る大衆が政治に参加することは、スペインの哲学者オルテガが言うように、ある意味では危険な可能性をもっている。オルテガと交流があり、かなりの部分でオルテガの考えに賛同していたホイジンガも、健全な社会の形成と文化の創造という面からは、大衆の台頭に消極的な評価をしている。一般教育の普及によって半教養を身につけた大衆は、質の高い文化の創造という点ではマイナスに作用すると考えたからである。文化は知的エリートが理解し所有できるものといった、ホイジンガの文化に対する閉鎖的な特権意識はあるものの、ホイジンガが文化の基礎条件として挙げた倫理感が、この時代人々の間で希薄化していたのも事実である。ナチズムの狂信的思想を受け入れたオランダ人が1930年代に増えたことや、判断力・熟考・創造力がない受け身の態度をもった人間が増えたことは、文化の成熟、社会の成熟にとってはマイナスであるとホイジンガは考えたのである。

最終的にホイジンガは、近代社会に対して、二つの批判的な見解を示した。一つは、19世紀以降、経済的価値・物質的価値の追求が社会を支配して以来、文化的価値・精神的価値の重要性が軽視されるようになった

たことに対する批判である。二つ目は、大衆社会の到来によって受け身の態度をもった人間が増えたことによる思考の均質化と文化の画一化・低迷化についての批判である。これらは、共に、当時の社会を端的に指摘していると言えよう。

晩年のホイジンガが、それまで研究してきた、中世、ルネサンスを代表とする文化の記述的研究を止めて、近代社会、近代文明に対する批判的見解を述べた文化の規範的研究にテーマを変えていったのは、少なからずホイジンガの生きた時代背景が影響していたと考えられる。それは、オランダの産業革命が、イギリス、ベルギーよりも半世紀遅れて始まった分、19世紀半ば以降、オランダ社会の近代化が急速に進み、ホイジンガを取りまく環境において、その影の部分がクローズアップしてきたことに起因すると考えられる。本来ならば、おそらく歴史家、文化史家でありたかつたホイジンガであるが、ホイジンガを取りまく社会状況の変化によって、どうしても彼を近代文明、近代社会批判家へと研究活動の焦点を変えさせてしまったのであろう。それは、ホイジンガにとって決して冒して欲しくない文化や「遊び」の崇高性を、近代化が効率性・合理性の名の下に蹂躪したからである。両者の直接の因果関係については別稿に譲るとして、本稿では、一つの視点として19世紀後半以降のオランダとホイジンガの研究活動の変遷を対照させて考察してみた。

## 〈注〉

- (1) 自由党の支持基盤は大商人・金融業者・貴族などであり、反革命・カトリック両党の支持基盤は、北部の大農民層・アーネムやトゥエンテの労働者層・ブラバントー帯のカトリック教徒などである。ここに宗教的政党と非宗教的政党の二つの陣営が生まれ、その後オランダの政治を長く左右することになる。ただ、近代的政党が結成されたのは1880年に入ってからであり、この時期の政党は、思想や主張が同じ個人々の集合体に近かった。
- (2) ユトレヒト大学の歴史学者P.ヘイルは、ファシズムと共産主義に対抗して「民主主義による統一協会」を設立し、文学者テルブラークと歴史家のJ＝ロメインは「ナチズムを監視するオランダ知識人委員会」を結成した。ホイジンガも著書『朝の影のなかに』で危険な時代風潮を警告した。
- (3) オランダ語では *verzuiling* (柱化) といい、社会の縦割り構造を意味する。これは1960年代まで全ての社会生活に影響を与えてきた。
- (4) イギリスに始まった産業革命は全ヨーロッパに波及したが、織物業が盛んな南部ネーデルラント(後のベルギー)では、早い時期に産業革命を経験した。フランス・ドイツとはともに1830年代に始まっている。
- (5) ホイジンガの生涯については、堀越(1987)が書いたホイジンガ年譜を参考に、筆者がオランダの文献に書かれている記事を加えまとめた。ホイジンガの業績は、本稿で取り上げたものが全てではないことは言うまでもない。ここではホイジンガの業績の中から重要で代表的なものを挙げたに留まる。
- (6) 植民地における強制栽培制度の非人道性を告発したムルタ

トゥリの小説『マックス＝ハーフェラー』、W＝クロース、ヘルマン＝ハテエルマンらが編集し、後にホイジンガも編集寄稿に当たった有名な文化雑誌『デ・ヒッツ』など、その多くが社会主義の立場をとりながら、20世紀前半のオランダ思潮に大きな影響を与えた文学革新運動。

〈引用・参考文献〉

- Braure, Maurice 1974, 西村六郎訳『オランダ史』白水社 1994.  
 Centraal bureau voor de statistiek 1975, 『75 jaar statistiek van nederland』  
 Hearder, Harry 1988, 『Europe in the Nineteenth Century 1830-1880』 Longman London and New York.  
 廣松渉 1993, 『近代世界を剥ぐ』平凡社, 172頁。  
 Huizinga, Johan 1924, 里見元一郎訳『ホイジンガ選集4』河出書房新社 1990.  
 ——— 1925, 『Overheid en Wetenschap』『De Gids』P. N. van Kampen & Zoom, p386.  
 ——— 1935, 『In de schaduwen van morgen』『VERZAMELDE WERKEN VII』H. D. TJEENK WILLINK & ZOON N. V, HAARLEM 1948.  
 ——— 1938, 高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫 1973.  
 ——— 1943, 『Mijn weg tot de historie』『VERZAMELDE WERKEN I』H. D. TJEENK WILLINK & ZOON N. V, HAARLEM 1948.  
 ——— 1943, 『Geschonden wereld』『VERZAMELDE WERKEN VII』H. D. TJEENK WILLINK & ZOON N. V, HAARLEM 1948.
- 堀越孝一 1987, 『騎士道の夢・死の日常』人文書院, 230-236頁。  
 今来陸郎編 1992, 『中欧史』山川出版社。  
 Jonge, J. A 1968, 『De Industrialisatie in Nederland tussen 1850en1914』Socialisysche Uitgeverij nijmegen.  
 Kossman, E. H 1988, 『The Low Countries 1780-1949』Oxford At Clarendon Press.  
 Krul, W. E 1990, 『Historicus tegen de tijd』Historische Uitgeverij Groningen.  
 栗原福也監修 1995, 『オランダ・ベルギー』新潮社, 20頁。  
 栗原福也 1982, 『ベネルクス現代史』山川出版社。  
 Lee, W. R 1979, 『European Demography and Economic Growth』Croom Helen Londdon, p259.  
 Lem, Anton van der 1993, 『JOHAN HUIGINGA Leven en werk in beelden & documenten』WERELDBIBLIOTHEEK.  
 水島治郎 1993, 『伝統と革新』『国家学会雑誌』第106巻第7・8号, 190頁。  
 Mokyr, Joel 1976, 『Industrialization in the Low Countries, 1795-1850』Yale University Press London, pp83-84, p189.  
 村川堅太郎他 1984, 『詳説世界史』山川出版社。  
 桜井哲夫 1984, 『近代』の意味』NHK ブックス。  
 vries, Johan de 1978, 『The Netherlands Economy in the Twentieth Century』Van Gorcum Assen, The Netherlands, p9.  
 吉岡力 1980, 『世界史』旺文社, 236頁。  
 (平成8年9月11日受理)